

NO.
187
1992
9月15日

非暴力直接行動

戦争抵抗者インター大山(WRI)大山市米島飼田T666水田ふ向#7

あかたふな...

あか

▼ むかしはあんなに往き来をしていたのに、ぷつんとだえて、もう十数年間 会ったことがなく、音信もなく なっていた「柳井秀」くんの「死をきいたとき、日並な表現だ、が、ぼくの胸裡のどこかに、とっぜん空白ができた気がした。 といつて、別にぼくの 日常が変ったわけではなく、彼との関係や記憶が急に 違うものになったというわけでもない。それなのに、この 空白感の一体、何だろうかー などあれこれ思った。そして だんだん判ってくるものがあった...

ぼくにとって柳井くんの死は、敗戦直後の一変転する、兵庫県の一都市ー姫路での、





無名詩人の死

—イオムと柳井秀—

① 空白の風景

…柳井秀の訃報が、とうとう来た。

三月七日、検査をしたら肺癌、ということ入院、数日後には脳に転移して危篤状態になった。十五日、神戸の高島洋が訪ねたときは、ふっと昏睡から覚めて、

「誘われて第一集にはありあわせの作品を一篇、軽い気持ちで出したんや。それがこてんばんにたたかれて、あけくにはイオム同盟の恥や、なんて向井が言いよった」

など、昨日のように45年まえのことを思い出して話したという。

▼イオム同盟というのは、一九四七年三月、向井孝（編集人—姫路）山口英（大阪）柳井秀（姫路—はじめ平柳秀三を名乗った）の三人で第一集を刊行、その高島洋（神戸）生田均（上郡）らが加わって、63集で終刊した詩誌「IOM」の発行グループの名である。

のち「即物的形象主義」と柳井秀が名付けたが、つまり

そのような詩を同盟員みんなが意図してかき、その具体的な作品によって、当時全国から注目を浴びた、といっているだろうか。

たとえば一九五二年度・五三年度刊「現代詩代表選集」（日本文芸家協会編）、日本前衛詩集（五〇年刊）、現代日本代表作詩集（四八年）などのアンソロジーに収載されたり、JAP同盟（東京）錯同盟（神戸）等「同盟」を名乗るグループが現われたりしたのは、その活動の影響ともいえるだろう。そして五〇年に詩集「戦争」、五一年に「平和」、五七年に「定本イオム同盟詩集」を刊行して、六〇年五月解散、その活動を終った。

高島洋のしらせでよくが姫路を訪ねた23日、十何年目ぶりの彼は、気持よさそうに軽いイビキをかいて眠りつづけていた。

熱は37度ちょっとぐらいい、顔色は全くふつう、とても今日明日の病人とは見えなかった。

角 13号より転載

（一頁よりつづく）
いわばぼくの「青春彷徨」ともいえる一時期を分ちがたく共有した友を失ったというだけでなく、それはまたまぼく、半世紀前のそのときに居合せて共に関係した…例えは「堺町の花鳥巻」や大坂とある「人の家」文連がつくって一年ほどづつづれた山電駅前の喫茶キャッスル、「いまの桂米朝（中川くんといふ）」が當時サリマンンしてて、残跡の風呂屋で、力、月一回、雨いてい

帰り際も、横顔をみていると、ふと起きてきそうな気がして、「おーい柳井」と呼んだ。

やはり反応はなかった。フシギな気がした。

一四〇年まえ、しよっちゅうやってきていた竜野の下田誠一が、二三日顔をみないナと思ったら死んでいた。23才だった。

松井や 九日 ひとの死を知らず

という串句をつくった。(どんないきさつで彼と知り合ったか、すっかり忘れてるのに、それだけを覚えてる)

こんどは深夜犬山へ帰ってきて、予定表の欄外に、数えて九日目の三月三十一日、「柳井秀義葬儀」と書き込んだ。書き込んでしまってから、「既定事実」にしてしまった気がして、それを黒くぬりつぶした。

それから毎日、黒いぬりつぶしをみながら、ふだんともかわらぬ日常を、ぼくが平気で暮らしているという、奇妙な感じの日々がつづいた。

そして十六日目の四月七日、とうとう訃報がきた。

すると別れ際の、横をむいてねている彼のベッド姿がすぐ脳裏にうかんで、そのままだんだん遠く小さくなっていく。とーまるで黒板ふきでふきとるように、ぼくのなかの風景が急に、がらんと空白になってしまっているのに気が付いた。

もう、話相手がどこにもいない! 彼だけしか……

「カーテン代りに配給毛布を吊って、間仕切りしていた花鳥庵」や、そこで朝10時から夜中の2時までやった「新瀨の合評会」。酔っぱらうと、いつも徹さんがうたい出す、へふるさとの小野の木立の「ソプラノ」。内海繁さんの、半年もたなかった「古本屋オリオン書房」と、「お城マー

トの闇市」。「苦味チンキ」をうすめた手製ウイスキーでよっぱらって、ぼくと彼が一しよに彷徨した。敗戦直後のそんな「風景」の一切合財を、ぼくのなからごっそりかきあつめて、持っていてしまったような空白、それがぼくにとっての柳井秀が死んだことの意味だった。



② 「死」と「詩」の死

岡田孝一さんからハガキをもらった。

「柳井秀氏の訃報が(非暴力直接行動)誌にありました。向井さんには特別の思いがあると思います。姫路での「イオム」のこと、柳井秀氏の詩業のことなど(象)に書いてくれませんか……」

ところで、柳井秀とかイオムといっても、知っている人がほとんどいないのではないだろうか。

それに「戦後の詩誌」ということだけで取り上げるとすれば、イオムのような同人誌は戦後10年に限ってみても、ぼくの思い出すものだけで十指にあまるし、「詩学」の年鑑などでみれば多分数百はあるだろう。それに拠った詩人? の数は千余を超え、発表された作品は万余に及ぶにちがいない。(イオムの存続した十二年間で、誌上に掲載したの

に高座落語鑑賞会
それから「阿部知さん
と、城ヤンクラブ」西校を
卒業して、東御健が
開業した。国道痛断角
のおかまバア」ぼくら
の毎日のまり場、スタ
ンド(3)までのマダレ
(内海繁さん宛て皆勤)
「三松ゲルニ階で5年
以上つづけた詩歌教室
と砂時計」……など
……思い出せばもうとど
めなく出てくる。それら
故旧の風景を、柳井
くんはその眼裏に一切
おさめ込んだまま、9
年4月7日のその日から
跡がたもなく消えて
しまったということだっ

は四三三篇だった)

それらの詩篇の一部分は、ときには数百部発行の個人詩集またはアンソロジーで再発表されるとしても、それ以上は省みられることなく、大ていはそれっきりで消えていく。それを一そう確定的にするのは「無名詩人としての死」である。誰かが彼の死に際して、その「詩」を最後に思い出し、とりあげないかぎり、「死」は彼と一しよに、その「詩」をも忘却へともっていく。

もちろん柳井秀の死も、だからまもなくぼくや山口らの死も、その例外ではない。

とすればごく少数の、神にえらばれた稀有の「戴冠詩人」を別として一ぼくらの如き「無名無数の詩人」の存在とは、そもそも一体何なのだろうか。

また、あぶくのように生起して限りなくつくられる作品が意味するところの「詩」とは、一体何であるのか。

自分に即していえば、柳井秀やぼくがイオムに拠って、ひたすら詩に賭けたその営為は、一体どんな意味をもつことだったのか。

かつて秋山清さんが、「詩は自分のためにこそ書く」といったとき、それにつづけてぼくは「無意味の意味」ということを思いうかべた。

柳井秀の死は、彼の詩の死をも告げることで、イオムの詩の死をもふりかえらせながら、はからずもそれは詩の「無意味の意味」を浮きあがらせている—と思った。

③ 「イオム」の「戦後風景」

—姫路駅前の大きな闇市。入り組み、曲りくねった露地でつながる雑踏をぬけ出して、はずれの豆腐町踏み切りの柵を越えると、そこからもう一望ずーっと焼野原の中の一木道だった。

まっくらなその一本道を、むこうから無灯火の自転車がふわふわ走ってきて、ぶつかりそうになった。それが柳井秀だった。「いま亀山まで君の家を訪ねてきたんや」といった。

後もどりして道からはずれ、瓦礫の小山を上下しながら百メートルほどいくと、枯草のなかに蹲るように、焼け瓦を平たく積んで壁にした四〇五軒の、マツカリ密造部落があらわれてくる。「おんばア」と呼ぶと「タレ……」と低く声がした。

キムチで一パイやりながら一小野膳写室に渡すばかりになつていた一編集済みのイオム一集の原稿をみせた。そしてその夜から、柳井秀がイオム同盟に加わることになったのだった。



た。そしてぼくは

わが忘れなば

誰か知るらんシ

— 田中克己

へい沢信男さんの本の題にもあった(と)ひとりつぶやくほかないのである。



▲ ぼくが東京大衆

の入新井から、深い

縁故をたよりに、姫

路へせっぱつまうて

疎南したのは、一九

四四年の冬で、四方、

すでに妻があらつ

た。(そのころ東京

は連続した空襲がつ

びき、市民は統々と

★ 46 年 6 月 10 日 日本に引寄せたとき、大塚徹さんが著名だった。戦前から日本詩壇などに発表して、手なれたうまい歌謡詩をかいた。

▼ 姫路で「詩」といえば、大塚徹さんが著名だった。戦前から日本詩壇などに発表して、手なれたうまい歌謡詩をかいた。

ぼくは—といえは戦争末期に東京から知人を頼って疎開してきた、いわばよそ者で、徹さんの詩風にはすこし抵抗があったが、ともかく文学仲間がほしかった。

徹さんたちが根城にしているという「花鳥庵」のことをきき、—と訪ねるうちに柳井秀と話を交わすようになった。

彼はぼくより二つ年下の24才で、すこしまえに中国から復員して仕事をさがしながら、「新濤」の編集を手伝っているという、農家の三男坊だった。彼のすすめでぼくは「新濤」の三号に、はじめて詩を発表した。

▼ 一方、四六年夏中文から復員した大阪の山口英が、四年ぶりに姫路のぼくを訪ねてきた。

彼とは、戦中の弾圧で壊滅した「新興俳句」の句作仲間だった。再開した二人の話題は俳句でなく、「詩」を「白紙の立場から」かいてみようということだった。そして、二人で「イオム同盟」を名乗り、詩誌「イオム」を創刊することが決まった。

ところで、詩のグループとしてはいささか奇異と思える「イオム同盟」を名乗ったのは、ぼくらとしてちよつとした主張がこめられていた。

ふつう、同人誌はもっぱら同人の自己顯示的な作品発表の場だけであって、それ以上の意味を全く失っている。そのような在り方へのアンチテーゼとして、作品発表以前の

「同盟活動」にまず重点をおく、「同盟」として作品をかき、発表する—ということだった。

具体的には、同盟活動がさしずめ「合評会」ぐらいしかない以上、向こう一カ年間はどんな事情をも排して絶対出席すること。また合評会は、「白紙の立場から」はじめるものである以上、提出された作品の一字一句にまで踏みこんだ、「相互添削的な介入」を「方法」として、相互の思想、世界観にまで立ち入って、最終的には「共同制作」を追求すること—だった。

柳井秀の参加によって、とりあえず第一集を出したあと、大阪の山口をも呼んで、改めて三人で、イオム同盟の「盟約」といったことをはっきりさせるために、話合うことになった。

それによって、ぼくと山口だけのときの、ややあいまいだった默契のようなものが、一そうはっきりすることになった。(もっともその意図的なきびしい励行は一年ほどで、だんだんいいかげんになっていった)

しかしいまふりかえって、もしイオムが他の同人誌と多少とも違っていたというならば、もっぱらこの「盟約」にあったといえるだろう。それがまたイオムの詩が、一年余りのうちに、大きな関心と評価を呼んだことと無関係ではない。

柳井秀の偶然でもあったイオムへの参加が、それゆえに、ぼくらにとってきわめて不可欠で重要な意味をもつものだった。

—というのと、とてつもないような盟約をきめたようだが、

伝手をたよって、四方へ転出した。ぼくのいたアパートは、東海道線の最寄りから50メートル以内というので、その強制取りやめしが毎日に迫るという事情があり、どうしてもどこかへ行くしかなかった。

▲ 姫路の淡い縁故と、この頃、ぼくの数カ月を置いていた前東京理新務所の仕事関係で大阪へきていて、たまたま中食に「むいめしや」に入った。めしをサカナにぼくは、持参水筒のなかの配給の酒をのんでいると、それをつらやましそうにみている

実はめいめい思いつくことをいって、それをならべただけのことで、ほとんど議論もしなかった。(問題はその盟約をどれほどにうけとめて、やりきれぬかである)

次にその「盟約」を書くこと

① 口語でかく。文語的口語をさけ会話的口語をつかう。(以前、口語を国語と誤植して発表されたため、その後国語として流布されている。ここで改めて、訂正しておくこと)

② 身の廻りの出来事、身近な関心事のなかに、詩の素材・対象を見つける。

③ 詩的な言いまわしをさける。平明な表現・散文的叙述で手短かく、要領のよい事務記録的な明瞭性、適確さを追求する。

④ 詩以前の立場・視点・思想・世界観を共同で追及する。

⑤ 他のどんな団体に参加するのも自由だが、第一義的に「同盟」活動が優先されねばならない。

⑥ 月一回以上集まる。(これに出られない条件の人は参加できない) 存続期間を十年とする。

▼ 盟約が具体的だったことが、履行をやりやすくしたといえるだろう。しかし「合評会」での議論や模索が、三人の作品に結びつくのは、発足して二ヵ月後の「三集」ぐらいからである。その前駆的な作品化を経て、ようやくイオム詩の方向は、「八集」以降で定まったといえる。

▼ そして一九集(49年)から高島洋、三二集(51年)から生田均、三六集(52年)から故崎本正らを新しい同盟員に迎え入れて、イオムの活性化をはかりながら、同盟活動の一翼として、51年・52年には全国の有名詩人二百人か

ら年賀状をあつめた「反戦平和年賀状展」、54年には「ピキニの灰・街頭展」などひらいた。

▼ 55年ごろから柳井秀は、イオムへ作品を出さず、集まりにも出ないようになった。理由は明らかでなく、ぼくらも追及しなかった。が、その一因は、彼がそのごもなんとなかつながっていた「日共」関係内部での、政治的な分裂抗争と無縁ではないと思われる。

「イオム」のアナキズム的傾向に対する党派的敵視はぼくらにもしばしばきこえてきたから、柳井秀はその間に立って長い間苦悩してきたにちがいない。(このことについては、ここではこれだけにとめておく)



④ 風景からの出発

柳井秀の作品を中心に、イオム初期の一集(47年3月)から七集(47年8月)の半年間だけを、ここでとりあげて、作品でその推移(変化)をみてみたい。

中老の紳士?と隣り合せた。思わず「パイをすすめ」のが象の口じりとなつた。時局談などの話があい・姫路の北條口に住む振南源次さんで姫路市議ということなどは、のちに知つた。話のはずみで、「そんなことやたら姫路へ来たなら」ということばと、「微用のがれでキスは事先を世話します」という話に、エエいと身をまかせた。それが姫路に象もゆかりもないよそのもの。その後一九七一年頃までの26年間、なんとなく居付く

イオムの当初からぬきんでて、とくに初期からいい詩をかいているのは山口英である。

とりあえず一集から、三人のものを一篇ずつ抜いてみる

▼ 風景1

山口英

—第一集

今夜は

月のあかりがうすぐらいので
母と子は寒い舗道にすわり
街灯の光輪の中で夕飯をたべる

母はすこしたべのこして

子の茶わんにうつしてやり
なんどもしろいお湯をのみ

ふとのぞくと、子の茶わんに
枯葉が一枚はいっていた。

挽歌1 向井孝

—第一集

わたし達は体を離れた

あかるい枯野のなかで

あわてて眼をそらしながら

今は

身づくろったり行んだりした。

午後 柳井秀

—第一集

皮膚が剥がれてうすくなる

港は定休日

カーテンをしめて下さい

それでもまだ顔をあげない少女

かたつむりは しずかにしずかに触角をのびし

蜜蜂は自分の羽音のために

忘失した時間を眠った。

「三つを比べると、向井はよくもわるくも「俳句的経験」を、柳井はそれまでの詩方法を踏襲している。そして、つづく二集もみるに足るのは山口のものだけといってよい。しかし三集以降になると向井の作品は、はっきり変わってくる。」

▼ 風景1

向井孝

—第三集

昼休みの人たちが工場の芝生にあふれていた。

なにも思いだせなくて、だれもかれも春日にぼんやりしていた。

あまりに明るくてしずかだった。

まぶしい日射しを浴びて、しんとならんでいた。

やがて遠く近く一せいにサイレンが鳴ってきた。

いつのまにかみんないなくなつて

あたりはもう日暮のような白昼だった。

▼ 風景3

向井孝

—第四集

むすめたちはリボンをつけていた。

若者らは車窓にむいてしきりにハモニカをふいた。

いつしか仲よしになると、一しよにべんとうをたべ

さわぎながら夏みかんを投げあった

たえまなくわらい声をあげながら

やがて疲れると抱きあったまねわりこけた

みんな・大きな買出袋をいくつも持って

この国中をゆききするのだった。

▼ 風景10

向井孝

—第五集

貨車にぎっしり人がはいつていた

たがいに息をひそめて、しんとしていた

まっくらでなにもみえなかった

着物一枚へだてて押しかさなりながら

くことになるそもそものほじまりだった。

× ×

▲ 振角さんの口利き

で、ぼくは神田町の軍

管煙工場中尾工業

の営業課員になつ

た。経理課にのち

陶本家になる橋本

忍がいたへ顔を合

せたが口をきいたこ

とはない

ぼくの仕事は、相生

の橋本造船へ工事

進捗の連絡にいく

ことと、毎日入れかわ

りやつてくる中尉大

尉クラスの将校を受

入れて現場を案内

し夜は、名目は寮

人気もないようだった

もう雨はしだいにはげしく まわりをうずめ
停ったままの列車は、
いつ発つともしれなかった。

⑤ 柳井秀の「風景」

柳井秀は二集で「螺旋階段」を、三集では「抱擁」「ベ
トの中で」「詩人とは」「祝婚歌」の四篇をかき、やや
「口語的表現」に近づくが、四集ではその反動というか後
退というか、「一つの旗のもとに」「山脈」の二篇で、プ
ロレタリア詩まがいのものを発表する。(多分これはその
前後に、ちょっと気があった彼女が日共に入党したのにひ
かれて、彼も入党するという身辺事情が左右したと思われ
る。そして当然この作品の評価については、イオム内で論
争があった)

ところが五集以降、柳井秀は一転してぼくらの注目をあ
つめる作品を示すようになる。

▼ 風景Ⅰ 柳井秀 — 第五集

朝の四時から売る切符を買うために
真夜中の駅に大勢の人達がならんでいた
荷物の上に腰をおろしたり、リュックをだいて横になっ
ていた。

切符売場のガラス窓はうすぐろく誰もいなかった
ときどき電燈がついて、若い警官や新聞記者や色眼鏡を
かけた男が
裏口からはいつ切符を買っていた

あかりがつくたびに
大勢の眼がいちように
その方をみつめた

▼ 風景Ⅲ 柳井秀 — 第五集

切符売場の窓がひらかれると
みんな立上って列を正した
遊び人ふうの男が二人

列をわって喰いこもうとしたが
誰も肩をせばめて入れなかった

若い娘の前になきて 尻や胸に手を入れてくすぐったが
娘は泣きそうな顔をしながら、身をかたばらせた

みんなだまって前へ前へともたせかけ
肩と胸と、尻と腰をくっつけて

じっと、前のくびすじをみつめていた。

▼ 風景Ⅵ 柳井秀 — 第六集

男の子が路ばたにころがっていた

近づくときなご餅みだいに泥にまみれていた
通行人はちょっと立とまってまたゆきすぎた

警官がきて背中をけると寝返りうった
もう一度けるとだまって眼をあけた

うすい頭の毛がしろく汚れて
手と足だけが妙に細かった。

▼ 母 柳井秀 — 第七集

ひるま何度も巡査に追われ、ほこりにまみれた箱をか、
えて、タバコを売った
その夜かえり道の焼け跡で、裸にされ犯されて、ほそい
溝にほりこまれた

自分の子供のような青年であった

や市町会合になつて
いる魚町の料亭で、
酒食の饗応をする
ことだった。

(昔者も調理人も、幾
用起れの従業員、魚
は、同様に漁師が、会
社の配給の肉で舟を
出しとつてきた。)

料理の膳は、将校に
けに出し、酒はすめ
られたときだけ、ほ
くものめだが、よく
の徳利の中味はお茶
だった。

将校がたがちなし
た皿のものを家へ持っ
て帰れたらと、いつぞ
思った。夜がそく暗
空しながら、空襲で

イオムに發表した他の作品は、およそ50篇ある。それから

約40、30篇をらび



アのマツカリ小屋は、こころあたりかと、病院の窓から見下ろしたが見当もつかなかった。

―と、ぼくのまばたきの一瞬のうちに、一望の瓦礫と草茫々の焼野原の風景がたちまち動き出し、まるでビデオの早送りのように、飛び交いだした光景が、みるみるぼくが見ている街並みへカチッと収まってきて、さりげなくもう動きだしているのだった。

柳井秀の死は、焼野原の中のマツカリ小屋が「いま」から跡形もなく消えてしまったように、そして彼の死がそれらの風景のすべてをかきあつめてもっていつてしまった意味―としての「詩の風景の死」をも告げるものだった。

さくばらんといえば、詩はそもそも―例えば瞬間の通過で眼前を消えていく―閃の光芒をとらえて「永遠化」するもの、というふうにも思われてきた。ぼくもまた「永遠の詩」をめざすことで、それを全うしたことがなかった。

ところが柳井秀の死は、その死で彼が忘却の彼方へ立去って、やがて消えるということでの、彼のイオムの詩もまた忘れさられる―という、思えばあたりまえで何の不思議でもないことを、改めて告げるものだった。

それを告げることで彼の死は、ぼくを含めたイオムのみんなの詩の「死」を、そしてイオム同盟が何であったかについての、尋常な帰結をぼくらに気付かせるものだった。とすれば戦後のひととき、ひたすらイオムに賭けつくしたといつてよいぼくらの営為は、一体どんな意味をもったのだろうか。

というよりも、それらイオムのことの、いわば爪のアカほどの瑣末ないきさつなどの―もうぼく以外にはおそらく書き手がなく、この機会を見送れば多分二どとかくことが

ないとはいえ―いまさらあれこれかきつづることに、一体どんな意味があるといえるだろうか。

その問いに対して、これという答えはぼくにはない。

ただ詩が、特別の選ばれた詩人だけのものではなく、なおぼくら二流、三流の無名詩人にとっても、ひたすら自分を賭けることにおいてイオムの経緯のように「在る」ものだとすれば、そのことの無意味の「意味」をどういうべきだろうか。

柳井秀の死は、最後にぼくにそのことを問いかけている…。



▼ 半年ほどの中尾工業をやめ、振角やとの娘の嫁ぎ先、新工場の寺西鉄工所の株式会社組織変更の手続きを引受けた延長で、その工場長（といつても工員30人、事務所は社長と男・女事務各一人）になった。大日本セルロイドの下請で、ステンレスタンクをつくった修理する態勢が仕事だった。

▼ 姫路機関庫への空襲攻撃で、北条口に借りた我家が全焼した。（これは大きな門柱その旧家で、持主が疎開したあとの留守番としてその一部を借りたものでない庭園が見事だった。飼っていた鬼が焼死した）
神屋町に移ってまでもなく、姫路のほとんどもを焼くつくした7月3日の

に抜けるので、屋上の

屋根の上で、星座鑑

賞をした。俳句を

つくつたりして、防空

監視をEのしんだ。

東京を出てから特高

の訪問がとどえてい

たのに、その夕暮

のことが、夜来て、時

高がやってくる…。

転交

I

好きで好きで……

▼ 一九五三年・アイ・ティ、23才。名古屋大須事件で指名手配される。地下潜行して、内灘町争奪戦の金沢へ。

▼ エフ・ティ39才。夫戦死・北朝鮮から子供三人を連れて引揚げ・保険会社につとめながら、「婦人民主クラブ金沢支部」をつくって活動。

▼ 一九五四年・「日共」石川県委員会。両名を反党反革命分子として、除名

ほくらがはじめアイ・ティを訪問したのは、一九七一年ごろだから、もう遠いむかしのことだ。

「こんなデマ書いて私の勤の先にまでまいたのよ。」
大事そうにエフさんがとり出したのは、すっかり黄ばんで古びたビラだった。

「そんなもの、もう捨てまっし……」

「母んとやねえ」

そういいながら、またエフさんは丁寧に包み直して、まるで宝物みたいに、小箱の底へしまいいこんだ。



「この夏下宿先で下よりつくく」

大空襲に逢った。この二回の罹災で、本宅も、家財なども完全に失なつた。かゝつてなげき押しに。それから、もう「リエック」に入れて持ちあふけるもの以外、道昇はいらん、賢わん」とそのとき思つた。(今その傾向はある)

▼ 姫路城はあやうく焼失を免がれた。千姫御殿の西の丸へ川部屋の廊下が数十あるが、解放されるときいて、(そのころ

「それで……と、ちよつと言葉をとめて
アイヤンは話を正切るように言った。

「……好きで、好きで二十年」

「エエツ、好きで好きで二十年……」

ふう君が大きな声でくりかえした。

それみらーぼくの家で何はなしのほずみた。ふつと、「好きで
好きで……」がとび出した。しかし、そんなふうにはかたえら
れなかったアイヤンたちの深いおもいを、ぼくらは、どれほど
知っていたらうか。

▼一九九三年六月一日、エフ・ディ・死。79才。

二〇日あまりたって、アイヤン宅を訪ねた。留守？と思ったら、
アイヤンは、家の前の道の果の、夕空を背に遠く川を仰っていた。

ふう君が、「リイ」と一声喚ぶと、

手綱から放れた、小さな白い影が一月散にとびはねてきた。

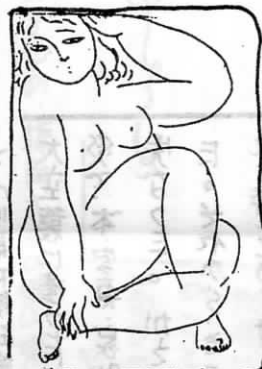
そのあとから、白いブラウスのエフさんが、ひらひら追いかけてくる！

「リイ」「リイ」

思わず、ぼくは何度も喚び声をあげた。

するとアイヤンが、ひとりぼっちで、ゆっくり近づいてきた。

誰もいない都屋だった。



呼びよせていた母・祖母・伊豆大島
に疎開していたのが、島には備隊がは
いつてきて暮らしたくなくなった。を合
めた親子とんへ行きたいところの
ないまま一夜だけ泊りにいった。
暗いあかりのない闇の中、数千人
の人影が右往左往していた。広い

城内に便所が
一つしかなかった。
(これがその野外
イジツなどの全
面です。便所

由緒をたずねる端緒となった。

▼「罹災証明書」があり、疎開帰
郷のためなら汽車の切符が無料
になった。それを利用して上京した。
病気の弟の下宿は焼失、伊豆へ転地
したという噂だけ聞いた。寺田社長
(といつても、ぼくより五才年長)の長兄が
寺田五郎といつて、アメリカから送還され

▼(下欄左端下よりつづき)「ゆがたれなほ」で、戦後の姫路、そして柳井くんそれに、特に親しかった内海がさんなど

このことを書くつもりだったのに、一体何のことやら・前置きだけで終ってしまった。すみずみまで下さい。向井 孝

床の面のまにに 白い布をかけた小机があつて
太いローソクの灯が一本だけゆれていた。

二つの花瓶にピンクのバラ二輪と赤いバラ

それから とつとなく巨きい白百合の花、四輪のかげに

さりげなく置かれた大の骨壺と、山の骨壺二つ

そのうしろで、エフさんはもう額の中へはいって

一枚の写真にへまつてしまつていた。

「エフさん……ほんまにあつさり死んでしまつて……」

そら、ぼくらもみんな死ぬのやけど……

好きで好きで……として 四〇年、の井沢さんとしたら

もう四一年が来なくなつてしまつて、

どんなにつらいことやろか……

どういつてはげましたら よいやろか……」

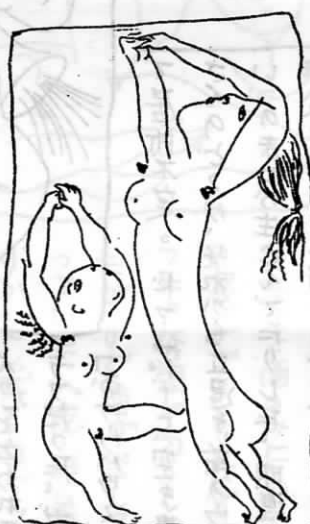
するとどこかですましたような声で
「ええ」と向いかえすと

「お、ほんとほまにいまからほじまつたのよ……」

だから井沢さんに言つて。これからずうつと、

五十年 好きで好かれて 終りなし……」

台所の方から、アイさんの夕餉をしらせる音がきこえる！



れ、共同の戦争と通信の外信部長をやつて
たので訪ねた。「旬日中に多分、数多終
結して話した。帰路、八重州口から一キロも
つづく所に並んで五時間ちかく乗車騒ぎを
待っていたら、種彦機が宿末、機銃掃射
をうけた。並木の残つた葉が、パアツとせいに
飛び散つた。どなり、風を吹きかきこした

ら、ぼくも血だ
らけになり、レ
よに鉄道病院
に運ばれた。リ
ニクも五郎が
ら抱つたま土

度まで切替くやつて、やつと帰へ戻つた。

▼〇月〇日正午、天皇の御ともお前さまを

きいた。敗れたことが判つた。遠い空をみ

まわしながら「国破れて山河あり」を聴感し

た。「国破れて……」そのとき、ぼくの母がにどつ

ぜん愛国者流のおもひが来ました。その一

か、煮れたような解散歌がやつてきた。

挽歌 II

こながーい
ござれ ござれ

1

「わたしの故郷の 赤崎のお盆は、

一家そろって お墓へ行って

白い麻穀束に火を点けると

ぐるぐる廻しながら 燃え尽きるまで

こながーい ござれ ござれ

と 呼びつづけるんよ」

と、ふう君が言った。

「こながーい、ってなに？」

「さあ、この火に、ということやろが」

それでぼくはいった

「こながーいは、この麻穀束、この間やろ。」

夜中に両手をさし伸ばし

その向に、愛しい人を呼びよせて

こながーい ござれ ござれ

と 抱きしめるんや。」



註 イミせん

出ぬうと、五ど

に四どは飲んで

いた。十どに一どはべろんべろんだった。

けど、月一回、アメリカ村に

集合する「友日、心斎橋デ

モのとぎだけけは（私服で

「酒のましてもろく、やつと

んか」となわれて以来、シ

ラフだった。ガードそばの

「おけらハウス」がつぶされ

て居所不定。ドヤ、アパート、空き家、四天王寺

さんのどろが、それから立退き、前のウリ事務所に

いつのまにか住こんでたりした。明度の整理で

押入れをあけると、正油さし、皿、瓶、スプーン、牛乳あけがなど

の外、事故が数回、田の等が一束、おぼほどと「千々金」ホ

スターの下着、死がごつそり出てきた。

樺太生れのザリヤクで、函館の大さなクリーニング店

の養子になつたと話したことがある。自分の面倒

もみきれないのに困った仲間、面倒見がよく、しつ

中けんがで傷だらけになり、顔が要形して見かけ

2

8月5日。エフさんの命日で・初盆。

三島公園の金が崎夏祭りに出かけた。

「コンハサを来れば、いつも必ず出会えただのに」

トミさんでもない……

若宮くんでもない……

とたんに、太鼓がドンと鳴って

みんなが音頭につれて動き出す。

注としていたぼくは、

とつぜん、中醫マリちゃんか誰かに

ぐいっと手を引っばられて

そのまま輪の中へはさるけこんだ。

それからもう、

見様見真似のでたらめ踊り、

両手さしあげぐるぐる廻る

「おなかいーいござれござれ」

3

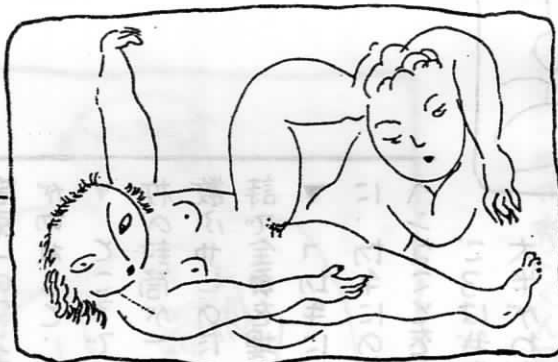
音頭がやんで踊りの輪がとまった。

すると耳許でふいに

「や、お久しぶりですしなへて」

註

下段



がつかないほどになつても、ケロツとして きた。

「は階へ」 くるるときは、大体ユメみたいな金

もうけプランを考えてきて、ひとしきり、それから

とつぜん「千両ほど」というのがきまりだった。

若宮くんの「労働者食堂」ができて、自分が

半分つづいたみたいになつて、一生けんめい、だつ

たが、店番は二日とつづかず、売上げ

をもつて酒のみにいつた。「山が初者

の家」ができて、管理人もにな

った。体調があるくなり入院し

たが、すぐ逃げ出して、酔っぱら

っていた。入院・脱出を何どかく

りかえし、或る日ベッドで死んで

いた。山崎で向い、き気がつくと

転換がはやく、どこから見かけるの

かイキなぐソッキーマフラー、鉢巻、

帽子などよく似合うダテ男だった。いま思

えば、ぼくにとつて、トミさんのすべてが、ぼく

の金が崎だった。(金白がなく若宮くん

のことがかけない。改めれば……) いま

のことがかけない。改めれば……) いま

のことがかけない。改めれば……) いま

